

綿帽子を買った狐

昔、といってもそれほど昔でない昔、大和郡山の柳2丁目の角に、小さな帽子屋があった。それは冬の寒い夜、お店の戸をトントンと叩く音がした。

「すみません、綿帽子はないでしょうか」

おかみさんが戸を開けると、女の人が寒そうに肩をすくめて立っている。

「子供の綿帽子が3つ欲しいんです」

あら、また綿帽子、なんて今日は綿帽子の売れる日でしょう。でもよかった。ちょうど3つ残っていた。女の方は帽子を受け取ると

「お代は、明日源九郎稲荷に取りに来てくださいな」

そう云って、夜の道を帰っていった。

次の日、おかみさんが源九郎さんに帽子のお代を貰いにいくと、社務所の人は誰も心遣いが無いという。おかみさんは困っていると、神社の本殿の前で、二匹左右に並んでいる狛狐の後ろから、綿帽子を被った3匹の子狐たちが現れた。

「おや、帽子を買いに来たのはあなただったの」

おかみさんは玉を啜えた狛狐の口の中から、玉を抜き取るとそれを大事そうに抱えて帰っていった。

この話は、郡山の民話の一つになっていますが、どう考えても新見南吉の童話「手袋を買いに」のパクリでしょう。「手袋を買いに」は小狐がやってきますが、この話しは母狐がやってくる。柳2丁目の角には最近までちゃんと帽子屋さんがあったそうです。その帽子屋さんが作った話でしょうか。帽子屋さんにやってきた母狐が、実は源九郎さんの狛狐（とはいわないか）だったというのは、僕のオリジナルですが、どうでしょう。

